Editorial

# 医療の品格

島根大学医学部　整形外科学教室
内尾　祐司

# The Dignity of Medicine

Yuji UCHIO, M.D.
Department of Orthopaedic Surgery, Shimane University School of Medicine

品格は本来，人柄や気品を示す言葉であり，『医療の品格』という題名は日本語としては適切ではないかもしれない。しかし，医療に携わる医療人を含めた医療全体を擬人化し，日本の医療には品格があるべきだという信念に基づいて，品格のない著者が論述することをお許し頂きたい。『医療の品格』はすでにお分かりと思うが，私淑する藤原正彦さんのベストセラー『国家の品格』をもじったものである。藤原さんはこの著書のなかで“国際化というアメリカ化に踊らされた日本社会の荒廃は「論理」と「合理性」頼みの改革では食い止めることはできない。今，必要なのは日本国家としての品格を取り戻すことである”というメッセージを力強く述べられている。同様の理由で，私は今の日本の医療の荒廃を食い止めるためには，日本の医療の品格を取り戻すことが必要ではないか，と考えるのである。本稿では，患者と医師との関係，新臨床研修制度，医療経済などの視点から私見を述べたい。

連日のようにメディアから流れる医療事故や医療訴訟の報道，医療行為そのものよりも合併症・危険性の説明に割かなければならない多くの時間，ときに不条理で辛辣な苦情に曝される医療現場などの現実は，今の日本医療の患者と医師との関係をどのように表しているのであろうか。医は仁術といわれ，医師が崇高な職業とされた過去はすでに遠く，今では医師への羨望はあっても，尊敬の対象ではないのでは，とさえ思えてくる。患者と医師との関係において，パターナリズムがよいと言っているわけではない。人間としてのフラットな関係は基本であろうが，医療は断じてサービス業ではない筈である。サービス以上の何かがあるからこそ，そこに医療人に対する尊敬・感謝が生まれ，医療人は誇りと使命感を持って自己の生活を犠牲にしてまで患者に尽くすことができるのである。医療が単なる契約関係であれば，たとえどのような理由があろうとも患者の期待権を侵害するあらゆる行為・結果は許されないことになる。厳しい労働環境の中にあって肉体的にも精神的にも追いつめられた医療人は危険回避のためのDefensive Medicine（防衛医療，保身医療）を行うか，現場を離れざるを得ない。今後，日本では医療が契約関係のみで成立するサービス業としてしか認識されないとすれば，米国のように患者も医師も弁護士同伴で手術説明をし，一字一句書面で確認する時代が来るのかもしれない。そのような社会を日本では患者も医師も望んではいないと思う。

さて，医療を担う次世代の医師の教育についてはどうであろうか。医師の質の担保（quality control）のために案出された新臨床研修制度は果たして研修医の質を高めることができ